

Vol.

4

第4号

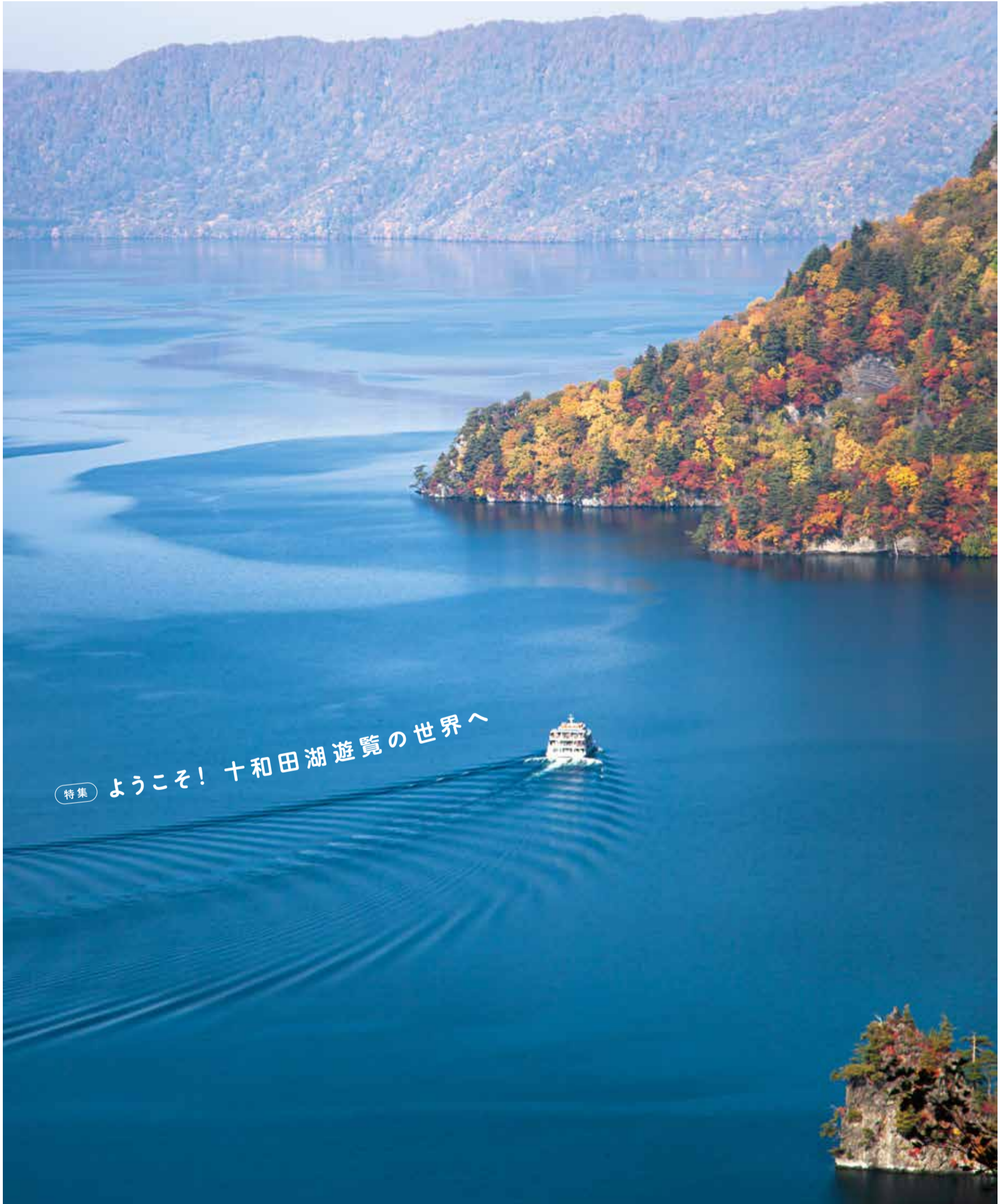
2026



十和田湖の自然とヒトが奏でるハーモニーに耳をかたむける

トワダノオト

TOWADA no OTO



特集 ようこそ！ 十和田湖遊覧の世界へ

Interview

十和田観光電鉄株式会社 十和田湖遊覧船支配人・深沢口英幸／フリー観光ガイド(元十和田湖遊覧船ガイド)・工藤泉／
青森県地域生活文化課(県史担当)総括主幹・中園 裕

ようこそ!

特集

十和田湖遊覧の世界へ

Welcome to Lake Towada Cruise!

十和田湖に遊覧船が浮かんでから100年以上、現在就航している二隻の遊覧船は、進水してから来年で60年。
「昔乗ったから」ではなく、「いまこそ乗りたい」十和田湖遊覧の世界へ。

一度と言わず何度も
季節を変えて
お待ちしております

湖上観光こそ、十和田観光の白眉

遊覧船は、十和田湖観光と切っても切り離せない。1908（明治41）年に来訪し、この地を広めた文人・大町桂月も、宇樽部〜休屋・生出間を船で移動していた。
「十和田知事」と呼ばれた武田千代三郎が会長を務めた十和田保勝会により発動機船「黒石丸」が浮かべられたのが'13（大正2）年。翌'14（同3）年にはひめます養殖に成功した和井内貞行が石油発動船「南祖丸」を湖に浮かべた、と記録が残る。
武田は湖上からの景観を特に気に入り、十和田湖は湖上から見るべきで、陸上から見るべきではない、とまで言った。

大町も、地元村長・小笠原耕一の求めによって'23（同12）年に起草した国立公園設置の請願文において、「日本の山上に舟遊の快あるは益以て珍とすべきなり」としており、湖上遊覧を特色に挙げている。
湖畔を一周できる道路ができ、展望台が整備され、湖上のアクティビティも充実している現在、遊覧船に乗らずとも、十和田湖を観光できるようになった。それでも、切り立った崖に、入り組んだ入江……、複雑な火山地形は、展望台からの「上からの景色」だけでは味わい尽くせない。船からの、水面からの景色をこそ、見てほしい。遊覧船は、いまも昔も変わらぬ価値を、ずっと提供し続けているのだから。



一等航海士
倉岡恵太さん

機関長
杉山裕さん

船長
湯瀬明宏さん

一等機関士
大久保通美さん

船長
加賀春美さん

船長
栗山光典さん

船長
大久保潤一さん

機関員
坂本和義さん

計6名が1隻に乗船し、遊覧船の運航を支える。主に操舵室で舵を握る船長・航海士と、エンジンの運転・整備を担う機関士の2チーム、計6人で運航する。2隻の乗組員と地上スタッフを併せ、全20人が遊覧船部門で勤務



遊覧船と
同じ年。こ
れも何か
の運命か
な

十和田観光電鉄株式会社
十和田湖遊覧船支配人

深沢口 英幸

Hideyuki Fukasawaguchi

Profile

1967（昭和42）年、十和田市生まれ。東湖小中、三沢商業高校を経て上京。1993年に戻り、十和田湖遊覧船に勤務。2012年より支配人

親が戻り、自分も戻る 気付けば親父の後を辿るように

動統34年目。十和田湖遊覧船支配人の深沢口英幸さんは、すっかり遊覧船の「顔」だ。十和田市街地で生まれ、5歳の頃、次男だった父が家を継ぐため、宇樽部の祖父の家に戻った。父は家業の民宿を手伝いつつ、ひめます漁にも出た。昼は十和田観光電鉄の遊覧船に勤めていた。「市内にいたときは冬でもアイスが食べれたのに」と幼少期を振り返る深沢口さんだが、木の枝を拾って遊び、アケビを取りに山へ入り、時には父の勤める遊覧船に乗せてもらうなど、すっかり

少年時代とは見違えていた。当時、十和田観光電鉄の遊覧船部門には約50人が勤務。遊覧船は4社が1日32便を共同運航。子ノ口にはバスが溢れ、子ノ口橋を越えて車列が連なっていた。「いまだったら観光公害、オーバーツーリズムだよ」と深沢口さんは笑うが、当時はその混雑こそが観光地としての誇りだった。だが現在、遊覧船はかつてのように「十和田湖に行けば必ず乗るもの」ではなくなってしまった。ピークだった'91（平成3）年には82万人超[※]を数えた乗船者数も、2025年には7.2万人と大きく減少。十和田八幡平国立公園十和田八甲田地域への来訪者数がピークの'03（平成15）年の334万人から'24年の234万人[※]と、約3割の減少で留まっていることと比べても、余りにも減少幅が大きい。2012年には2社体制となっていたもう一社の十和田湖観光汽船株式会社が経営破綻し、十和田観光電鉄ただ一社での運航となった。入社してから窓口業務、そして船長としても乗船していた深沢口さんは現在、支配人として、十和田湖遊覧船事業に責任をもつ立場となった。収支のバランスを見つ、シフトを組む。緊急時の対応もあり、支配人が担う責任は重い。

安全を守り、従業員を守ること そして、遊覧船の運航を続けること

遊覧船の大敵は強風。揺れに強い双胴船と言えど、風速12m/sを超えれば、厳格に運休している。初夏に雲海を発生させる霧もやっかいだ。朝8時を過ぎ西湖の霧が晴れてきても、中湖はまだ真っ白なことも。そんなときは団体客が多い朝一の便から欠航となってしまう。「運休になれば心が痛い。お客さんも残念に思うし、収入だってゼロになる。でも、安全にはかえられない」と深沢口さん。

知床での遊覧船沈没事故があった2022年、十和田湖遊覧船でも、乗客から不安の声があがるようになった。だが、安全への取組を伝える機会となり、逆に評価が高まった。旅行会社から「よく休む」と評判も、再評価されることになる。

従業員を守ることに心砕く。遊覧船で働く人は、現在およそ20人。遠方からの通勤者のため休屋に寮もあり、3分の1が寮に住む。冬季運休期間はバス部門の整備工場などの配置換えだけではなく、奥入瀬溪流温泉スキー場をはじめ、夜越山スキー場（平内町）や七戸町営スキー場へ人事交流として出向させ、通年雇用を守っている。かつてに比べ従業員は高齢化し、現在運航を支えるのは、定年を一度迎えたスタッフも多い。若手の採用も、一筋縄ではいかない。それでも、遊覧船を守らねば、という思いは人一倍強い。

「中山崎を越えて、目に飛び込んでくる千丈幕は圧巻だと思う。遊覧船から見るのは、湖の成り立ちそのものなんだよね。十和田湖にとって必要だから、誰かが続けていかないと」

はからずも、第一八甲田、第二八甲田の2隻と、同じ年だという深沢口さん。「昭和42年生まれ。船はまだ大丈夫か、まだやれるか」と、自分を重ね合わせながら目を細め、遊覧船を見つめていた。

※ともに青森県「青森県観光統計概要」及び「青森県観光入込客統計」より

いまでも頼られる遊覧船ガイドの 結婚相手は十和田湖！？

深沢口さん（左ページ）が寂しく感じているのが、生声による遊覧船ガイドがなくなってしまったことだ。生声から録音テープへと代わり、おもてなしのかたちが変化した。それでも、遊覧船湖畔一周イベント[※]のように、ガイドとしての出番があれば、マイクを握る女性がいる。

工藤泉さん。遊覧船のガイドとして、そして現在はフリーランスのバスガイドとして、旅行者をもてなし続けている。

泉さんのガイドとしての資質は、20代半ばに行われた自身の結婚式で垣間見える。十和田荘での披露宴、マイクを握った彼女の口から飛び出し

フリー観光ガイド
(元十和田湖遊覧船ガイド)

工藤 泉

Izumi Kudo

Profile

1962（昭和37）年、小坂町生まれ。小坂高校卒業後、旅館勤務を経て、十和田観光電鉄遊覧船ガイド、定期バスガイドを経て、現在フリー

十和田湖が大好き。 帰ってくるたび、そう思える

「ベニマスになれ」—— テーブル化を機に外の世界へ

遊覧船に12年務めた頃、大きな転機が訪れる。合理化により、ガイドの業務が録音テープに切り替わるようになったのだ。

「事務や売店に残ってほしいと言われたけれど、それは嫌だった。そんな時、お世話になった休屋の方から『いつまでも（湖に留まる）ヒメマスじゃなく、外へ出るベニマスになれ』と背中を押されたんです。それがバスガイドへの挑戦でした」

30代後半という、ガイドとしては遅すぎる再スタート。十和田八幡平国立公園の、そして北東北全体の知識を独学で叩き込む日々が始まった。遊覧船で培った泉さんの声の力は、舞台を移して

たのは、あまりに真っ直ぐな告白だった。「全然マイクには慣れていなかったはずなのに、最後のスピーチでつい言っちゃったんです。『旦那様も大好きですけど、もしかして相手方よりも十和田湖が大好きかも』って。あの時は、湖への愛が溢れてしまったんでしょうね」

鉱山勤めの父の下で育ち、高校卒業後は一度東京での就職が決まりかけたが、「やはり十和田がいい」と、大川岱の「ホテルニューカルデラ」に就職することに。フロント業務などを経て、知人の勧めもあり、23歳で遊覧船ガイドの世界へ飛び込んだ。当時はガイドが30人から50人もいた全盛期。20代での転身は遅い方だったという。

「当時は高校を出てすぐ働く子が多かったから、私はお姉さんの方。暗記しなきゃいけない台本に

苦労して、初乗船の時は手が震えるほどでした」台本通りに話そうとする遊覧船ガイドが多いなか、泉さんは「台本のないガイド」を心掛け、常に引き出しを増やそうにしていたという。「手帳を片手に、テレビや日常から得た情報を常に仕入れていました。決まった内容を流すだけの録音テープでは、50分の乗船時間は長く感じられてしまう。でも、そこにお客様との掛け合いや季節のエピソード、歌を交えることで、時間はぐっと豊かになるんです」

遊覧船ガイドとして、歌は必修だった。乙女の像完成を記念して佐藤春夫が詠んだ「湖畔の乙女」はもちろん、国立公園50周年記念曲である芹洋子「出会いを求めて～十和田湖へ」など十和田にまつわる歌を歌い継いできたのもガイドだった。



も遺憾なく発揮され、いまでは特定の旅行エージェントやVIP客から指名が入るようになった。

泉さんは、宇宙飛行士になった向井千秋さんが「十和田湖は地球の瞳のよう」と言っていたことを教えてくれた。台本になくとも、地域の物語を語り継ぐことこそが、ガイドの役割だと話す。

一方、現在の遊覧船には寂しさも感じている。「かつては生の声で溢れていた遊覧船が、今は録音だけ。せめて1便だけでもいいから、生のガイドを復活させてほしい。もしやる気がある人がいれば、私の経験を全部教えたいと思っています」

歴史ある家に嫁ぎ 暮らしの中の美しさを見る

泉さんが住む家は、十和田湖のすぐ目の前。

1902（明治35）年1月、八甲田雪中行軍の別動隊として知られる弘前連隊が休憩した場所でもある。大町桂月も宿泊したという。

どれほど遠くへ旅をしても、戻ってくるたびに十和田湖の良さを再認識するという泉さん。

「朝日が昇る前、空を染める紫色。5月中旬、10日ほどしか見られない新緑の若草色。そんな豊かな自然が、当たり前にあるんです」

一方で、厳しい冬や不便さを受け入れる覚悟をもつことも、40年以上湖畔で過ごしてきた泉さんにとっての「当たり前」だ。

「不便を楽しんでいるんですよ、本当に」ありのままの十和田湖を、ありのままに受け入れる泉さん。屈託のない笑顔の奥には、十和田湖への深い愛情が滲んでいた。

※2025年11月9日、(一社)十和田湖国立公園協会主催で行われた「十和田湖湖上遊覧一周ツアー」

目を凝らして
今日も安全運航～

Lake Towada Cruise Background Story



①碇のロープ交換をする第三八甲田（昭和48年建造）。②陸に上げての整備は5年に一度。3隻を年ごとに使用す。③冬の間にも2～3度は集まり、船の除雪を行う。④地上スタッフは券売業務だけでなく、運航の本部機能を備える。⑤窓からの景色が、遊覧船いばんのおもてなし。⑥おもてなしは、日々のお手入れから。⑦操舵室。見どころでは遠慮を落とすことも。⑧遊覧船から見た休屋。高い建物がなく、スカイラインが揃う景観は国立公園ならではの



④ 乙女の像 言わずと知れた十和田湖のシンボル。湖から見ると、作者・高村光太郎が残した「この原始林の圧力に堪えて、立つなら幾千年でも黙って立ってろ」という言葉が響く

湖上から見ずして、十和田湖を見たとはいえない



⑦ 烏帽子岩 武田は屹立した岩に松や灌木が生える様子を「岩石の美十和田第一」と称えたと



瞰湖台から見た中湖。湖岸には一切の人工物が見えない、100年前と変わらない景色の中を遊覧船はゆっくりと進んでいく



⑥ 六方石



⑧ 五色岩



⑨ 千丈幕

左) 柱状節理の六方石。中) 八之太郎が流した血によって赤く染まったと伝わる「五色岩」。右) 十和田湖を代表する景観、御倉半島の千丈幕



位置は次ページを見てね

⑤ 剣岩



⑩ 見返りの松

上) 細かな節理が刃のようにみえる剣岩(つるぎいわ)。下) 中山崎半島の先端、中山崎にある「見返りの松」



御鼻部山展望台にて(1965年頃・青森県所蔵歴史館さん資料)

Column

十和田湖、上から見るか？ 下から見るか？

いま、見直すべき景観観光。
人はなぜ十和田湖に魅かれるのか？

いま遊覧船から見える景色は、じつは100年以上に渡って愛されてきた景観だった。
青森県史の普及に携わる、青森県庁の中国裕さんに考察していただいた。

湖上遊覧～美しさに魅了される～

十和田湖へは一度行けば十分だ！ そう思っている人が多いようです。自動車で湖へ向かい、休屋にたずむ「乙女の像」の前で記念撮影し、湖畔で食事をして帰る人が多いからです。確かに、それだけなら一度行けば十分かもしれません。けれども十和田湖は何度行っても飽きない魅力を持っています。歴史に学びましょう。明治の時代に青森県知事を務めた武田千代三郎は、1922(大正11)年に刊行した著書「十和田湖」で、「十和田の美は其の湖岸の景に在り、湖上より望むべくして、陸よりは見るべからず」と主張しています。

遊覧船による「湖上遊覧」こそ、湖の美しさを堪能できるというのです。当時の遊覧船は小舟でしたが、船上から見るべきだというのですね。

100ページを超える立派な著作物は、今日無数にある観光ガイド本の元祖といえるでしょう。その中から、ごく一部を紹介します。

中山半島の西側には、入江がたくさんあります。この入江を代表する景勝地が「自籠の入江」(次ページ⑪)です。大型の観光遊覧船では近寄れない場所ですが、小舟では入江の中に入れます。半島の先端が「中山崎」です。そこには「見返りの松」(⑩)という枝振りの良い松があります。中山半島には島や入江の他に、湖岸に映える木々の美しさを称した景勝地がたくさんあるのです。これに対し御倉半島には「剣岩」(⑤)や「烏帽子岩」(下写真、⑦)など、岩肌の美しさを強調する景勝地が多数あります。中でも、下の写真に見える烏帽子岩の美しさは、武田も「十和田第一」と紹介しています。

湖上から目を上方に転じると、黄色っぽい崖と赤色の岩肌が見えます。前者が「金屏風」で、後者が「五色岩」(⑧)です。極め付きは御倉半島中程に広がる断崖絶壁の「千丈幕」(⑨)でしょう。作家の大町桂月が、仲間と一緒に湖上遊覧を楽しんでいる際に名付けたものです。

武田や大町らは、二つの対照的な半島や湖岸の木々の美しさに大いに魅せられ、十和田湖の宣伝に努めました。けれども、それ以上に湖の保護を強く訴え続けていたのです。

湖景鳥瞰～壮大さに心を奪われる～

十和田湖は二重カルデラ湖で、外輪山が湖を取り囲んでいます。山奥の中に存在し、湖畔に平野が少ないため、湖周辺をめぐる道路ができるまで、集落の中心である休屋と子ノ口の間を、人々は遊覧船(小舟)で移動していました。

しかし1920年代半ばに湖畔をめぐる道路が開通すると、湖を高台から眺める美しさを説く人物が現れました。彼の名前は小笠原松次郎。「臥雲仙人」の号を持ち、新聞や雑誌で十和田湖の魅力を外に宣伝していました。

道路が完成した頃から、彼は湖を鳥瞰する美しさについて、地元紙の「東奥日報」や専門誌に記事を書き続けました。彼が最も強く推していた高台が「瞰湖台」(⑥)でした。

当初は展望台のようなものではなかったのですが、1934(昭和9)年8月に省営自動車(現JRバス東北)が開通。停留所が設置され、バスガイドがバスから降り、乗客に景色を紹介するようになりました。1941(昭和16)年に展望台として整備され、観光客が歓声を上げたものでした。

湖が国立公園に指定されてから、湖上遊覧の見どころに加え、展望台からの眺めも紹介されるようになりました。秋田県側の「発荷峠」(④)や「白雲亭」(②)、湖の北側に位置する「御鼻部山展望台」(上写真、次ページ⑩)など、展望台ごとに湖の眺め方が大きく異なるのが興味深いですね。

十和田湖を外に広めてきた人たちは、湖上遊覧の美しさに魅了され、湖景鳥瞰の壮大さに心を奪われたのでしょうか。けれども、彼らは湖を外に広めることに努めながらも、それ以上に湖の保護について強く主張してきたのです。

瞰湖台の宣伝に力を入れた小笠原ですが、最も強く主張し続けていたのは、他ならぬ湖の景観を維持することだったのです。

昨今、景勝地の観光開発や誘客促進が叫ばれています。けれども、それ以上に保護や保全について目を向ける時期が来ていると思います。

湖を知り尽くし、大切にしてきた先人たちの活動があったからこそ、十和田湖は今も美しさを保っているのです。歴史に学ぶこと。それは未来をより良いものにするということでもあるのです。



執筆 中国裕(なかの・ひろし)

青森県地域生活文化課(県史担当) 総括主幹。新聞や雑誌への執筆と講演活動を通じ、青森県史の研究と普及活動に取り組む



湖上にたずむ烏帽子岩(1920年代・中国裕提供)

上から見る？ 下から見る？ 十和田湖景観マップ

ただ「眺めて終わり」ではありません。湖上から、展望台から。その両方の表情を見られるのは、十和田湖ならではの特長なのです。

●……湖からの眺め ●……展望台からの眺め



A 発荷峠 東北自動車道から入ると最初に十和田湖のパノラマが広がる。峠から湖畔までの車道が整備されたのは昭和初期



B 紫明亭 展望台脇に「日本新八景」の碑が建つ。近年はハート形に見えることからパワースポットともいわれるようになった



C 白雲亭 東屋からふたつの半島が重なるように見える。徒歩でしかたどり着けないが、湖越しの朝日を見ることができる場所



D 御鼻部山 瞰湖台、発荷峠と並ぶ三大展望所は、1011mから湖全体を見渡す。かつて青森県と秋田県が展望台整備を競った



E 十和田山 1053mと外輪山のうち最も標高が高い。山頂付近にオンコ（イチイ）が生育することから御子（おんこ）岳とも



F 瞰湖台 2006年の宇樽部トンネル開通以降静かになったが、休屋から最も近く、眼下に中湖を一望できる、歴史ある場所



B 自籠の入江 柱状節理の壁に挟まれた細長い入江。休屋からほど近くだが深山幽谷の世界。入江の奥には自籠岩が聳え立つ

国立公園の「いま」をお届け！

NEWSLETTER

「トワダノオト」の舞台、十和田八幡平国立公園。現場におかれる環境省十和田八幡平国立公園管理事務所から国立公園について知ってほしいことをお伝え！

ニュースレター
from 環境省

次の千年へ向けて、廃屋撤去のその先へ

2015（平成27）年からはじまった、休屋の廃屋撤去事業。’25年12月までに、元宿泊施設、商業施設であった廃屋（倉庫等も含む）11棟の解体撤去が完了しています。

廃屋が撤去されることで、倒壊の危険がなくなり、景観が改善する一方、「撤去した跡地はどうするんだろう？」と思っている方も多いかと思います。環境省による廃屋撤去は、ただ撤去してオシマイ、ではありません。十和田湖を世界に誇れる旅行先としての国立公園にするため、跡地に新たな事業者を誘致し、民間による高付加価値で、国立公園ならではの体験を提供してもらう、ということまで見据えています。

どのような事業者に来てほしいかは、「十和田湖1000年会議」という、国、青森県、秋田県、十和田市、鹿角市、小坂町、経済団体、地域団体が集まる会議体によって、計画がつけられています。地域の皆さんが集まるワーキンググループの意見も取り入れられ、計画がつけられました。そして今年、跡地への公募を開始する予定です。誘致する事業者を決める過程では、環境省だけでなく、自治体、地域団体、有識者からの意見も聞きます。十和田湖にとって本質的に必要な事業を、持続可能な私たちで提供できる事業者に、休屋のあらたな仲間になってほしいと考えています。



上) 計5回以上行われたワークショップでは、十和田湖として守りたい価値観が共有された。下) 2021年11月に撤去が完了した十和田観光ホテル

トワダノオト

発行:2026年3月 発行元:環境省東北地方環境事務所 十和田八幡平国立公園管理事務所
青森県十和田市奥瀬十和田湖畔休屋486 Tel:0176-75-2728
編集・執筆:合同会社ネイチャーセンス研究所 写真:なりた いつか
デザイン:村上圭以子 イラスト:福士陽香



トワダノオト
読者アンケートは
こちらから